

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2023年 10月 21日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 農学研究科

職 名・学 年 教務補佐員

氏 名 崔 麗華

助成の種類	令和5年度・国際研究集会発表助成			
研究集会名	2nd World Forum on Urban Forests			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口 頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()			
発表題目	Quantifying the effect of tree volume on thermal comfort within urban parks using a 3D laser scanner			
開催場所	米国・ワシントンDC			
渡航期間	2023年 10月 14日 ～ 2023年 10月 22日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000 円		
	使用した助成金額	300,000 円		
	返納すべき助成金額	0 円		
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費 目	金 額 (円)	
		航空運賃	210,000	
		宿泊費	66,000	
		滞在費	20,000	
		海外保険	3,200	
その他(空港までの旅費)	6,200			
以上に助成金を充当				
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)			

成果の概要/崔麗華

国際連合食糧農業機関(FAO)主催の都市森林国際学会 (WFUF) は 2018 年初めてイタリア・マントヴァで開催され、およそ 70 カ国から来た研究者や団体が持続可能な都市、そして健康な都市生活のために都市林が与える貢献について議論した。今回、第 2 回都市森林国際学会 (2nd World Forum on Urban Forests) は米国・ワシントン DC で 2023 年 10 月 14 日 (月) から 20 日 (金) にかけて開催され、過去 5 年間世界各地の都市で行った都市林の変化、新しいチャレンジ、新しい研究や、新しい技術を共有し、情報、ノウハウ、知見を共有する場になった。

学会は 2 名の教授、Professor Aruni Bhatnagar (Division of Environmental Medicine , University of Louisville) および Professor Frances Kuo (the Landscape and Human Health Lab, University of Illinois) の都市林が健康に与える貢献に関する講演によって幕を開けた。講演で 2 人の教授は都市森林が必要な理由を明確に示し、会場に集まった都市林分野で活動している研究者、NPO、NGO、行政団体の取り組みを認め、学会の雰囲気盛り上げた。

都市林が提供するクーリング効果が地球温暖化への対策として期待されており、私を含む 12 人の発表者がこのテーマに関して発表した。日本、ルワンダ、イギリス、ドイツ、フランス、米国、オーストラリア、イタリア、ケニアなど、世界各地からの事例が紹介され、都市林のクーリング効果に関する国際的な知識の共有が行われた。私は公園内の樹冠体積と熱的ストレスの関連性を分析したが、他の研究者は蒸発散によるクーリング効果や日陰の効果など、さまざまな視点から樹木のクーリング効果を評価する研究を紹介し、学びの多い学会だった。また、都市の温熱環境を改善するためのプランを提案するモデル研究も紹介された。これは、都市の規模や緑地のキャパシティに基づいて適切な緑地を計画し、都市の暑熱環境を効果的に改善するための提案である。

謝辞：

個人的に、今回の学会参加は、同じ分野で活躍している若手研究者に知り合い、都市森林分野を体表できる先生らの講演や発表を聞くことができ、収穫が多い学会でした。経済的な負担が大きかったワシントン DC での 5 日間の学会だったが、京都大学教育研究振興財からの助成金を受けて無事に発表と参加が実現できました。今回の学会を通じて得た知見やネットワークを今後の研究活動に生せるよう、頑張っていきたいと思いません。